

糸雨を待つ

1191003 石田知弘

指導教員：吉田晋

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

1. はじめに

私の出身地である島根県松江市は、山陰地方の中央に位置する宍道湖畔の城下町であり、城郭を中心として河川や堀が縦横にはしる”水の都”でもある。堀では観光客向けの遊覧船が運航している。松江の気候の特徴として、一年を通して雨の多い地域であることが挙げられる。雨に対する一般的なイメージは鬱陶しい、うんざりするなどの否定的なものが多いが、松江では、雨を観光資源の一つとして肯定的に解釈した観光戦略を展開しており、雨とともに暮らす松江ならではの着眼が面白い。松江では”糸雨”という表現が似合うような、糸のように細く繊細な雨（図1）が降ることが多く、城下町の街並みと相まって風情のある風景を演出している。



川瀬巴水 (1883-1957) 《湖畔の雨》(1932年、東京国立近代美術館蔵)

図1 松江に降る雨の描写

2. コンセプト

1. で述べた松江ならではの着眼を基に、雨と建築の関係を見つめ直す。雨を否定的に解釈している現在の建築とは異なる、雨を建築意匠の魅力の一つとして肯定的に解釈する建築を提案する。

3. 敷地選定

敷地は島根県松江市に位置する堀川遊覧船の乗船場とする。乗船場には城北乗船場、大手前乗船場、城南乗船場の3箇所がある（図2）。

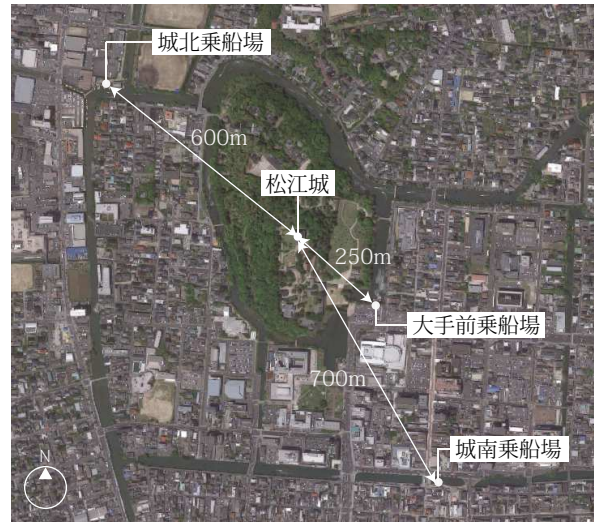


図2 乗船場の位置

敷地の選定理由は以下のとおりである。

- ・”城下町”、”水の都”という松江らしさの象徴である堀に接しているため、松江ならではの着眼を表現するのに最適である。
- ・現在の松江では希少になった、堀を表空間とする敷地である。
- ・江戸期を彷彿とさせる堀の風情と、静かな緑色の水面による落ち着いた雰囲気が糸雨の魅力を引き立てる。

4. 敷地読解

4-1. 堀と松江

松江では江戸期につくられた堀割が現在もほぼそのまま残っており（図3）、堀からは江戸期の風情を感じ取ることができる。また、堀と陸の距離が近く、且つ柵を設けていない箇所が多いため、親水性が高い（写真1、写真2）。

かつては舟運によって物資が運ばれていたため、堀が街の表空間であり、人の集まる場であったが、現在

では道路が表空間となり、堀では観光客向けの遊覧船が運航しているだけであるため、松江の人々の姿はあまり見られない。



江戸期の掘割

現在の掘割

図3 江戸期の掘割と現在の掘割



写真1 堀の水辺空間①

写真2 堀の水辺空間②

4-2. 城北乗船場

城北乗船場は大型車駐車場と隣接している。堀との距離は近いが、樹木や待合室による圧迫感が強く（写真3、写真4）、堀に対して閉じた印象を受ける。



図4 城北乗船場の現状

写真3-写真4 敷地写真

4-3. 大手前乗船場

大手前駐車場は一般者駐車場と松江城に隣接している。松江城に最も近い乗船場であるため、多くの観光客が利用するが、待合室が小さいため、利用客を収容しきれていない（写真5）。堀沿いには松の木が並んでおり、落ち着いた木陰空間を有する（写真6）。



図5 大手前乗船場の現状

写真5-写真6 敷地写真

4-4. 城南乗船場

城南乗船場は商店街と隣接している。主要な観光スポットではないため、待合室は他の敷地より小さい（写真7）。商店街の広場があるが、周囲の建築とのつながりが薄く、利用者が少ない（写真8）。



図6 城南乗船場の現状

写真7-写真8 敷地写真

5. 設計方針

5-1. デザインの方針

現在の一般的な建築は、屋根に降った雨水を横樋で受け止め、集水器で集水し、縦樋をとおして排水管へと流している。この方法によって雨水を速やかに処理することができるが、建築を介して大地へと伝わる雨水を見ることはできない。また、雨水が大地へ浸透しないため、都市型洪水などの問題が起きている。

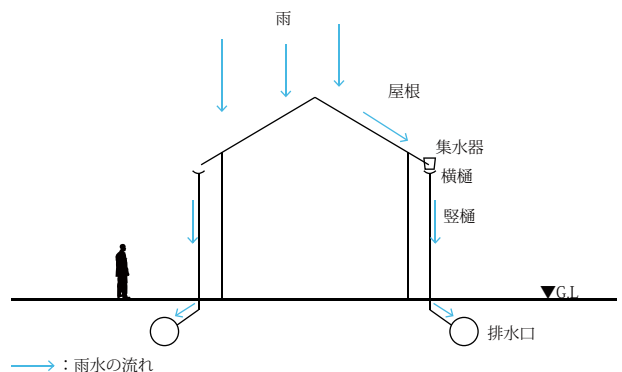


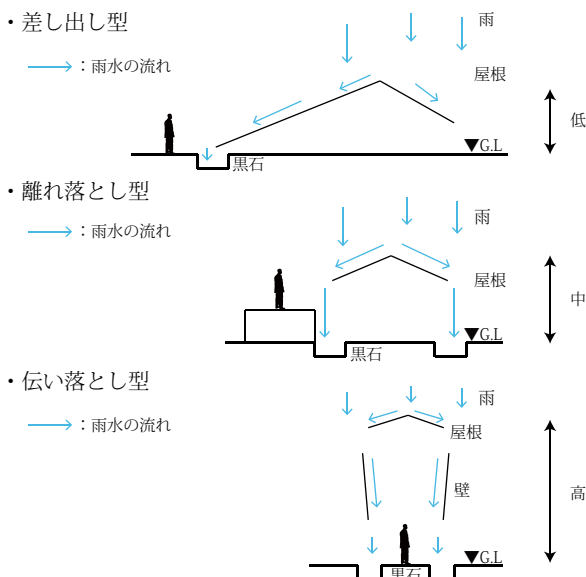
図7 一般的な建築の雨水処理方法

これらを踏まえて本設計では、建築を介して大地へと伝わる雨水を、建築意匠の魅力の一つとして可視化し、雨水が大地へ浸透する建築を考える。

雨水を魅力的に可視化する手法として以下の3つの手法を設計の軸とする。

- 1) 人の目に近い屋根によって屋根の濡れ模様を見せる。
- 2) 横樋及び縦樋をなくすことで、屋根から離れ落ちる、または伝い落ちる雨水を見せる。
- 3) 黒石を敷くことで、濡れ模様を見せながら雨水を大地へ浸透させる。また、2) によって落ちてきた雨水の飛散を軽減する。

上記の1)～3)の手法に基づき、且つ敷地の形状に見合った形で建築空間化する。



5-2. 提案の方針

松江の食材を宣伝・販売し、それらの食材を実際に飲食できる施設を提案する。観光客だけでなく、地元住民も日常的に利用できる機能を付加することで、水辺から離れてしまった松江の人々も足を運ぶ場となることを目指す。メインとなる食材を3つのタイプに分けて3つの敷地に分配する。

店名：松江茶寮



6. 設計内容

6-1. 城北乗船場

・待合室

屋根を低くすることで、人の目に近い屋根を実現するとともに、既存の待合室が持つ圧迫感を緩和する。出入口の屋根の切り欠きを台形にすることで、アプローチから見たときのパース効果が強まり、屋根を大きく見せることができる。

・松江茶寮 菜

まちと待合室をつなぐ細長い空間に直線状に配置する。敷地の幅が狭く、屋根を低い位置まで伸ばすことができないため、周囲との高低差を利用して相対的に屋根を低く見せる。2つの直線状ボリュームの中央に配置した通路をGL+1200mmの高さまでスロープでつなぐことで、なめらかに視線の高さが増減する。通路はまっすぐ待合室の入口に向かっており、象徴性の高い空間となっている。

・事務所

他敷地の建築と隣接しているため、屋根の形状を片流れとし、1方向のみ屋根を低くする。片流れの屋根によって高さが確保できるため、外観の屋根の迫力が強まる。内部空間は、高さを活かしたハイサイドライトからの印象的な光と、軒下から地面に反射して入ってくるぼんやりとした光によって照らされる。

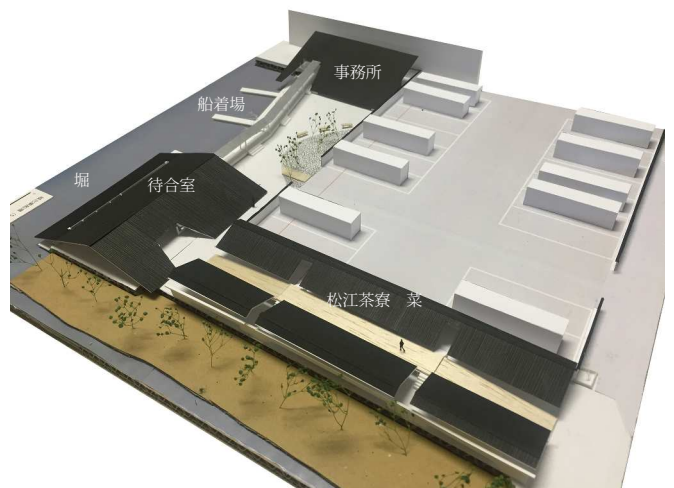


写真9 模型写真



図8 イメージパース（雨天時）

6-2. 大手前乗船場

・待合室

既存の待合室より最大収容人数を増やし、松江城に最も近い乗船場としての機能を満足するものとする。台形に切り欠いた屋根は、堀から見たときは屋根を大きく見せる効果を発揮し、待合室から堀を見たときには視界の広がりを演出する。

・松江茶寮 茶

堀の奥まった部分に屋根を突き出し、屋根から堀へと直接雨が落ちる空間を計画する。また、屋根の松の木に面した部分を長方形に切り欠くことで、松の木の影を建築へ落とし込む。

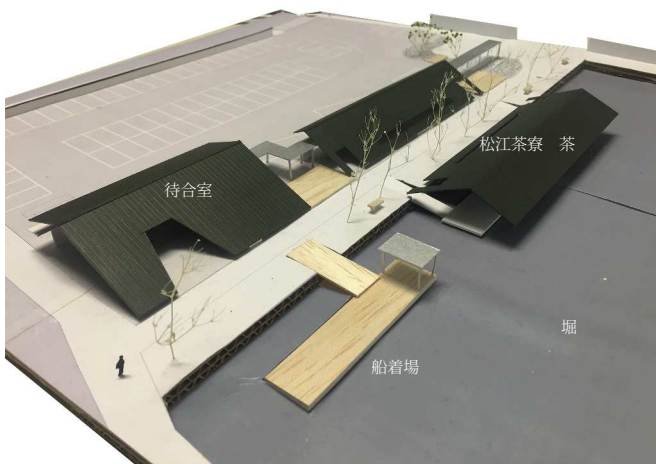


写真10 模型写真



図9 イメージパース（雨天時）

6-3. 城南乗船場

・待合室

敷地が狭いため、屋根の濡れを見せるのではなく、屋根から伝い落ちる雨を見せる。雨を鑑賞しやすい黒色の壁を待合室を囲むように配置する。周囲から見たときは白い箱にしか見えない。

・松江茶寮 果

屋根を低く伸ばすことで、既存の広すぎる広場の面積を削減し、広場と建築がより密に関わるようにする。床を半地下化することで、低い軒下のデッドスペースを削減し、広場との近い距離感を保つ。

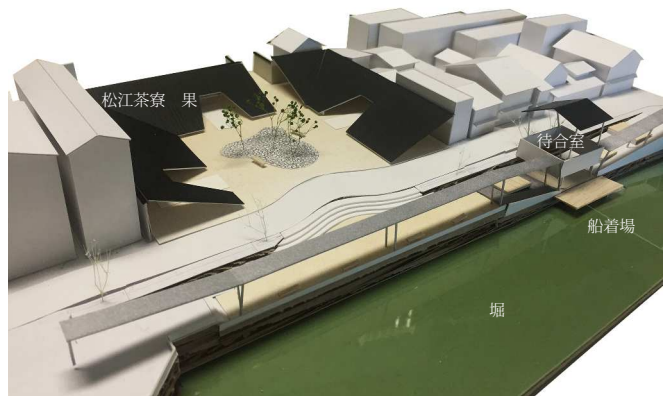


写真11 模型写真



図10 イメージパース（雨上がり）

7. まとめ

雨と建築の関係を見つめ直し、それぞれの敷地形状に見合った形で、雨が建築意匠の魅力の一つとして機能する空間をつくり出すことができた。一貫して雨を主役として設計を行うことで、屋根を中心として建築が独特な立ち振る舞いを呈し、結果的に雨天時以外でも魅力的な空間となった。黒い木屋根で外観を統一したことにより、松江の既存の景観を過度に損なうことなく、存在感のある建築を作り出すことができた。